

## グローバル化時代における英語教育とは

長谷尚弥

(関西学院大学)

「グローバル化」や「国際化」の時代にあつて、日本では英語教育がますます重要視されてきている。これまで以上に英語によるコミュニケーション能力を高めるべく、中学や高校では「英語の授業は英語で行うことを基本にする」動きに拍車がかかっている(文部科学省, 2008 ; 2017)。また、2020年には小学校での外国語活動(実質的には英語活動)が3年生から行われるようになり、5年生以上に対しては「英語科」が導入される(文部科学省, 2017)。真のグローバル化とは世界をボーダーレスに捉え、言語や文化を含めた多様性を認めることから始まると思うが、少なくとも日本の英語教育に関しては、真のグローバル化の流れに対して逆行しているように思われる。グローバル化の時代における英語教育を語る時、言語や言語教育・学習の持つ社会政治的な意味を考えることが重要であると考ええる。

世界には数多くの言語や文化が存在するが、それぞれが持つパワーには大きな差がある。例えば、英語のような強大なパワーを持つ言語や英語圏文化がある一方、そうではない言語や文化も数多く存在する。グローバル化とは、そういった様々な言語や文化がお互いに接触する機会が増えることを意味する。そういった状況においては、ともすれば強大なパワーを持つ言語や文化はそうではない言語や文化、さらにその話し手に大きな影響を与えてしまう。前者が後者よりも優れているといった錯覚をもたらすこともある。真のグローバル化の時代にあつてもっとも重要な視点は、言語相対主義・文化相対主義(多言語多文化主義)であると考ええる。パワーの差こそあれ、すべての言語すべての文化にはそれぞれ固有の価値があり、お互いの間に優劣をつけることは出来ないし、すべきでもない。

グローバル化の時代にあつて英語教育を考えるとき、もっとも重要な視点はこういった考え方ではないか。その高い普及率とパワーのために、当面は「英語一人勝ち」の時代が続くと思われる。そのため、日本を含め世界中で英語教育は今後も盛んに行われることであろう。しかし、英語という言語が置かれているそういった状況を考えるとき、hyper-central language (Cook & Singleton, 2014) といわれる英語を教え、学習し、使用するにあたっては多言語多文化主義の考え方が一層重要になってくると考える。具体的にいうと、英語は決して他と比べて優れた言語でもなければ万能な言語でもなく、この地球上に存在する数千とも言われる言語の一つに過ぎない。英語をあくまでも相対的に捉え、そういった謙虚な姿勢で英語と付き合っていくことが今後ますます重要になってくると考える。

**References:**

文部科学省 2008 「高等学校学習指導要領」

文部科学省 2017 「小学校学習指導要領」

文部科学省 2017 「中学校学習指導要領」

Cook, V. & Singleton, D. (2014). *Key topics in second language acquisition*. Bristol: Multilingual Matters.